

「私の酒害体験」(後篇)

島根県断酒新生会 出雲支部

杉浦 勝栄

こんな出来の悪い患者でも退院の日が来ました。昭和60年5月21日です。診察室へ退院の挨拶に行きました。その時先生は、「退院おめでとう。今日は大社で断酒会がありますので、今夜は是非奥さんと二人で断酒会へ行ってください」、と言われました。その時の私は、ただ「ハイハイ」の二つ返事でした。「病院の玄関を出てしまえば俺のモノ！ 何が断酒会、断酒会なんか出るものか」、とっていたのです。



(写真は標高1238mの吾妻山・島根県仁多郡奥出雲町)--->

しかし、福田先生は私への言葉の最後に、こう付け加えていました。「診察が済んだら、私も大社の会場へ行くから、君も必ず来て欲しい！」。この時も、何とオセッカイな医者、と思いました。しかし、「60歳を過ぎた医者が、診察を終えて大社まで来るのだから、顔だけでも出さないとイカン」と思い、その日の夕方、妻と二人で例会場の大社町文化センターへ向かいました。

初めての会場です。私が会場に入ると、「杉浦さん、よく来た、よく来た」と声を掛けながら迎えて下さいました。25-6人の会員、家族の人たちでした。この時の嬉しさや感動は、今でも鮮明に覚えております。この時の状況を思い出すと今でも鳥肌が立ちます。後で分ったことですが、その時の感動は、皆さん方からの励ましでした。

酒のため家族からも疎外され、ひとつ屋根の下で暮らしていながら、家族からの優しい言葉は久しく掛けてもらっていませんでした。また職場でも、私は酒を飲んで臭いニオイをさせて職場に出ていましたので、早く辞めて欲しい、二度と出てくるなと無視されていた毎日でした。

自宅がある町内でも同様です。私の酒は大人しい酒です。大声を張り上げたり喧嘩をすることもなく、飲んで寝るタイプの酒だったので、近所の人たちには知られていないと思っていました。しかし、皆さんは知っていたのです。町内で顔を合わせても、逃げるようにして私を避けていました。

そんな私が断酒会へ行くと、「よく来た。皆が止めている。断酒会に来れば、必ず酒は止められる」、と励ましてくれたのです。嬉しかったですね。この時初めて、この人たちと一緒に、私も酒を止めることができるかもしれないと思いました。よし、この人たちと例会に出てみよう。このように皆さんから励ましを受けたのも、実は事前に福田先生は、支部長さんに電話していたのです。

この日から、毎日の断酒会通いを本気で始めました。先輩や家族の人たちから、「杉浦さん、明日も待っているよ」、と頭を叩かれお尻を叩かれての例会通いでした。不思議なことに、例会に通うようになってから、酒が入

らなくなりました。勿論職場でも、皆が夜の8時、9時まで残業しているのに、私は福田先生が職場の上司に電話をしてくれたお陰で、遅くとも6時には仕事を終え、「お先に失礼します」、と言って断酒会へ行きました。

その頃職場では、「あの杉浦が、何が酒なんか止めるものか。今にまた飲む、賭けてもいいぞ!」、と賭けの対象にもなっていたようです。しかし、皆が遅くまで残業している時でも、私だけ早く帰らせてもらっている。その人たちのためにも、酒を飲む訳にはいかなかったのです。

幸いにも島根県では、職場の協力と少し努力をすれば、月に25日ほどは例会出席が可能です。事実私もそれ位の日数は例会に通っていました。出雲という場所は地理的にも恵まれていたと思います。

そんな生活を続けていた昭和61年の春から、JRに移行するための具体的なスケジュールが現場に示されました。当時、私の職場には148名の職員がいました。しかし、「62年4月のJR移行時点では、職員が84名に減らされる」ことになり、JRへ移行する職員には、61年の10月に辞令が発令されることになりました。

その途端、当局の介入によって組合の分裂が始まったのです。それまで私の職場は国労(国鉄労働組合)ひとつで、しっかりと纏まった組合でした。私も20代から30代半ばまで、組合の役員を一生懸命やった一人でした。一緒に組合の役員をしていた委員長や副委員長、さらに書記長までも一晩で「鉄労」に移っていました。皆がJRに移りたかったのです。

しかし、この時は仲間に裏切られたと思いました。同時に、この先私はどうなるのか不安になりました。当然私も管理者の一人から、「鉄労へ移った方が君のためになるよ」、と誘われましたが、それも断りました。退職するまで、「国労」の組合員を通しました。酒のために職場に迷惑を掛けているだけに、とても84人の中には入れないだろうと思っていました。

(写真はJR西日本大田市駅・大田市大田町)――>

高校を卒業して23年間、国鉄でしか仕事をしたことのない私にとって、国鉄を辞めさせられるのはとても不安でした。そんな不安が頭の中で堂々巡りするだけで、気持ちの整理がつかない私は、福田先生に電話をして相談に乗って頂くことにしました。先生の診察が済んだ夜、日赤の福田先生を訪ねました。



★2

確か精神科の診察室だったと思います。先生は出前のお寿司を用意して待っていてくれました。そして、私は次のことを話しました。

★JRに組織が変わること。

★148名が84名に減らされること。

★組織分裂のこと、等々先生に話しました。

私の話を黙って聞いていた先生は、私にこう諭しました。

★今になって何を慌てているのか。君は、飲んで仕事をしていた時、懲戒免職になっても仕方がなかった。それが、仕事を続けられていることに感謝しよう。

★仮に84名の中に入れてなくても、懲戒免職ではなく、国鉄の都合で整理されるのだから退職金も受け取れるし、履歴書にも傷はつかない。大変な違いだよ。

★国鉄だけが仕事場ではない。紹介される仕事に就くのも自分で探すのでも、酒さえ止めておれば何とかなるよ。

しかし、その場では先生の言葉には納得できず、「他人^{ひと}のことだと思って、何を気休めなことを」と思いました。それから暫く、悶々とした生活を送っていました。ただ、家族、殊に子どもたちには、「来年の3月で国鉄を辞めるかも知れない。その時は、大型免許を持っているので、ダンプか長距離トラックでも乗って働くので、心配せずに勉強して欲しい」と伝えました。

昭和61年10月の末だったと思います。上司に呼ばれました。「遂に来た」と覚悟を決め、上司に付いて所属長の席まで行きました。渡されたのは白い紙、「辞令 昭和62年4月よりJR職員を命ず」と書かれていました。上司は、「いろいろあったが、よく頑張っている。これからもよろしく頼む」と言ってくれました。

九分九厘諦めていただけに、JRへ移れることになりました。84名の一人に入れてもらいました。まったく畑違いの仕事への転職を覚悟していただけに、諸手を合わせたくなるほど嬉しかったのです。間髪を入れず駅前の公衆電話から、家族と福田先生に連絡しました。反面、親しかった多くの仲間との辛い別れでもありました。

昭和62年4月1日。民間会社として新たに出発する日です。当日、各自に担当課の発令と職務分担の指示が出されました。今までの私の仕事は全て外されており、外回りの営業職でした。職場には残ったものの、窓際に追いやられたことを実感しました。そんな折、新しく赴任した所属長は、昔から仲の良い知り合いでした。その所属長が私を呼び、「何処かへ出るか?」、と尋ねてくれました。

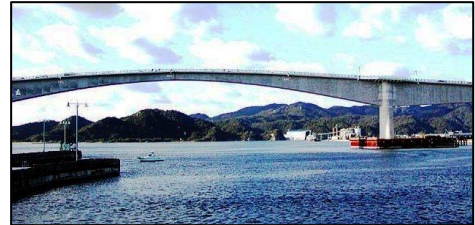
二つ返事で、「お願いします。ただ自宅から通える範囲で。我儘を言いますが」と応えると、「太田の駅が君を欲しがっている。太田なら通えるのでいいだろう」。これも二つ返事で受けました。そして、昭和63年2月、太田市駅の旅行センターへ転勤しました。

この所属長は、彼が管理局に勤めていた頃、私が上司の命令で裏金を作ったことを知っていて、その時の調査にも関わった人でした。私が日赤へ入院した時も、わざわざ見舞いに来てくれて、「あの件がアル中になった

一因だったな」と慰めてくれました。それだけではなく、私は人一倍酒好きのためよく飲めたこと。一方では、アルコールの裏に潜んでいる「毒」の部分の全てを理解していなかったことであつたのだと思います。

太田市駅で約二年半勤めた平成2年5月21日、今度は太田市駅の営業助役に呼ばれ、「口頭での内示だが、2-3年大阪か京都へ広域転勤で出してもらえないか?」、との話がありました。即座に、「それは、お断わります」と答えました。

(写真は江島大橋・松江市八束町江島と境港市渡町を結ぶ)-->



転勤するとなれば、家庭の都合で単身赴任になる。「知らない土地での一人暮らしは一升瓶を抱えて行く様なものです。どうしても

もということなら、辞めます」と告げました。その日の夜、家族に、「正式な発令が23日にある。今度は本当に退職する」と伝え、退職願を書きました。

次の日、駅長に退職願を渡した時、「杉浦さん、2-3年のこと。すぐに時は経つ。その時はまた戻れるから、行ってくれんか。今辞めたら後悔するよ」と慰留してくれたのですが、よく考えた上での私の結論でしたので辞めることになりました。有休が多く残っていたので、私は平成2年6月30日付でJRを退職しました。

★3

当然、そのことは福田先生にも伝えました。先生は、「仕方ない。酒さえ止めておれば、良いこともあるよ」と言って了解して下さいました。そんなことがあった後、福田先生から連絡がありました。「杉浦君、新生園へ行かんか。職員が欠員になっているはずだ。すぐ確認するので、履歴書を作っておくように」。まさに寝耳に水でした。

しかし、国鉄とJRしか勤めたことのない私にとって、福祉の仕事は畑違いでした。早速日赤へ足を運び、福田先生に私の気持ちを伝えました。

★出雲の私の家から大根島の新生園迄、片道47Kmもある。特に、冬場の雪道を考えるととても通えない。

★福祉の仕事は全く経験がない。ましてや、アルコール依存症の人を相手にする仕事、とても無理。

★私自身断酒して僅か5年。自分のことで精一杯、とても人の世話など出来ない、等々。

しかし、福田先生は、

★新生園は島根県の断酒会と私とで造った施設だから、アルコール依存症の人を対象に運営していること。

★また開園当時は、園長(井原)、次長(片岡)、指導課長(橋)と、組織の中枢を会員さんが受け持っていたが、今は職員に会員はゼロ。

★入園者の気持ちを分ってあげられるのは、同じアルコール依存症の断酒会員しかいない。大卒でも福祉の資格を持った者でも、アル中の気持ちが分るのは、アル中しかいない。是非、新生園へ往って欲しいと逆に説得されました。

後日、新生園で形だけの面接を受けて、平成2年7月1日付で、「社会福祉法人共和会 救護施設新生園指導員を命ず」、の辞令を受けました。6月30日まではJR職員、7月1日付で新生園の職員と私の履歴は続いています。

自信のない私に福田先生は、「入園者の話をよく聞いてあげて下さい。そして、君がそうであったように、止めてたくても止められなくて辛い酒を飲んでいたことを伝えて下さい。そして、酒を止めておれば、普通の人と何ら変わりなく仕事ができることを入園者の人たちに見せて下さい。それが君の仕事だ」、と励まされ、新生園へ通うことになりました。

そして、平成17年3月31日まで、定年になるまでの約15年間勤務させていただきました。この間、多くの人を見てきました。どうしても酒を止められず、自ら命を断った何人かの人たちを見送りました。また、故郷へ帰りたくても、家族や周りの反対で帰れず、独りアパートで死んだ人も見送りました。

外出先で飲酒した入園者に面接をして事情を訊いた時、同席した職員から、「杉浦さんって甘いネ」、と言われて少し嫌な思いをしたこと、等々。たくさんの思い出があります。しかし、20名余りの職員がいる中で、一番口が悪く、しかも大きな声で怒る私が入園者の人たちに一番可愛がられました。

退職の時は、色紙に寄せ書きまでして渡してくれました。新生園では初めてのことだったそうです。私が入園者の人たちに特別親切にしていたとか甘かった訳ではなく、同じアルコール依存症という病気を持つ私の心が、入園中の人たちと仲良くさせてくれたのでしょう。断酒の継続とアルコール依存症からの回復という人生の大きなテーマについて、むしろ私の方が入園者の人たちから教えられることが多く、私の方が15年も新生園で働かせてもらったことに感謝しています。

そして、もう一つ感謝しなければならないことがありました。それは、新生園に勤めて三年目だったと思います。当時の井原 利^{とし}理事長から、島根県断酒新生会の事務局長をするように言われました。また、井原理事長は園長に対しても、「断酒会の事務局長を杉浦にさせたい。いろいろ迷惑を掛けると思うが、園として協力して欲しい」、と頭を下げて頼まれていました。

新生園の指導員として勤務しながら、断酒会の事務局長としての仕事。まさに二足のワラジを履くことになりました。それ迄事務局長を担当したのは大先輩の方たちで、それぞれ現役時代は隠岐汽船の役員や島根日産で役員をした人で、しかも断酒歴の長い人たちでした。

そんな方々の後任として私なのです。40代後半の年齢で、断酒歴も僅か8年余りのこの私にです。固く断ったのですが、最後は園長から、「杉浦さん、受けてあげなさい。井原さんもよくよく考えた上でのことです。あなたならきっと出来ます。井原さんを助けてあげて下さい」、の言葉でした。

★4

新生園での仕事も一生懸命しましたが、事務局の仕事も大変でした。当時、20の支部と4つの地区を抱える所帯です。全国各地の断酒会からの案内があり、医療や行政との対応も担当します。さらに、島根県は毎年8月に山陰断酒学校を開催しており、その申し込みの受け付け等も全て事務局の仕事でした。

(写真は三里ヶ浜の夕日・島根県益田市高津町)--->



今振り返ると、当時は若かったし燃えていました。新生園での当直の時は、よく徹夜もしました。一緒に泊まる夜警のおじさんや職員から、「杉浦さん、良く続けね。無理をせんように」、と声を掛けられました。このように私が新生園と断酒会で頑張れたのも、断酒会へ通うために協力していただいた当時の園長と職員の方々の協力があつたからこそと感謝しております。

そんな苦労を続けているうちに、事務局の役割が有効に機能する体制を確立する必要があると思うようになりました。昭和62年4月から、幸いにも先輩たちが本部会館を建てる目的で、各例会場で募金箱を廻して資金を募り始めました。5円、10円、100円と各人が進んで差し出した募金が、いつしか郵便局の定期貯金で2,000万円を超す金額になっていました。

平成10年5月24日の総会で、本部会館の建設用地取得案を提起、承認されました。実のところ、総会の2-3年前から、なるべく県の中央部で建設するのが大切だと考えて建設用地を探していたのですが、立地の良い場所は高く、条件の合う場所はなかなか見つかりませんでした。その後、宍道町に住む先輩が町有地を譲ってもらうよう交渉を重ねた結果、安価で譲り受けることが可能となりました。

平成11年5月23日に開催された総会で、本部会館の建設案を提起しました。そして翌年の平成12年11月、松江市宍道町の現在の場所に事務所と例会も開催できる二階建ての本部会館を約2,500万円で完成させることが出来ました。

会館にはパートの事務員さんを配置し、事務や経理などの管理業務をお願いしております。また、定款で定める役員定数の中で、事務局長を補佐する事務局次長を複数配置して、組織運営や行事の企画、そして財務、教宣と各分野の担当をお願いしました。

これは、現在の一般企業は60歳の定年が一般的で、定年になってから断酒会の手伝いをするとしても僅かな期間しか活動出来ません。現職で本来の仕事をやりながら、会の手伝いも出来る体制にしておきたかったからです。このように体制を整えた上で、4期8年勤めた事務局も若い会員さんをお願いしてから、現在の体制が固まったように思います。

福田先生に教えられた言葉で、私がもう一つ大事にしていることがあります。それは、「杉浦さん、自分の断酒が軌道に乗ったら、断酒会の手伝いをして下さい。必ず自分のためになりますから。酒で困っている人たちに手を差し延べてあげて下さい。世の中からアルコール依存症は、増えることはあっても、決して減ることはありません。一人でも多く助けてあげて下さい。断酒会で止めることの出来た者の恩返しですよ」。そこで、確率的には非常に悪いのですが、地域での酒害相談も保健所と連携してお手伝いしております。

最後に、皆さん方をお願いしたいことがあります。それは、私が日赤へ入院して、福田先生がして下さいましたこと。当時は個人のプライバシーは大事にされました。その上^{いま}現在は、個人情報保護法があって、患者さんの同意が無ければ、医者であろうとケースワーカーであろうと、「〇〇さんが退院します。これからは、地域の断酒会の皆さんが支えてあげて下さい」、という情報は出せません。

否認の病気と言われているこの病気の患者さんに、「退院のことを断酒会に知らせても良いですか」と訊けば、駄目なことは分り切ったことです。一人でも多くアルコール依存症で苦しむ方を助けるには、こちらから病院へ出向いて院内例会に顔を出すか、入院中の患者さんを地域の例会に誘うことでしか情報は得られません。

福田先生がことある毎に訴えている様に、「アルコール依存症の患者さんを救うためには何が必要か。それは、プライバシーや個人情報よりも、兎に角、患者さんが自助グループへ繋がってもらうことが一番大事なこと！そのために、我々は何をすべきなのか」。こんな信念のようなものが、現在の断酒会には消えてしまっているように思えてなりません。

偉そうなことを申し上げましたが、これからもアルコール依存症の方を一人でも多く救済すること、そしてアルコール依存症から立ち直っていく方を支えている断酒会が広く社会から認知されるための活動を続けていくこと、これが断酒会の中で酒を断ち、立ち直らせていただいた我々の使命であるとお誓いして、私の体験発表を終わります。ご静聴、有難う御座いました。(完)